

立ち居につけて都恋しも……

——紫式部の旅路——

はじめに

長徳二年（九九六）夏、紫式部は、守として赴任する父為時に伴われて、越前国へ下向した。『紫式部集』の歌の配列からして、往路は、琵琶湖西岸沿いのコースをとって舟行し、塩津に上陸したものと推定される。式部にとっては、おそらく生涯で初めての船旅であった。

近江の海にて、三尾が崎といふ所に、網引くを見て

20 三尾の海に網引く民のてまもなく立ち居につけて都恋しも

また、磯の浜に、鶴の声々に鳴くを

21 磯がくれおなじ心になづぞ鳴くなと思ひ出づる人やたれぞも

夕立しぬべしとて、空の曇りてひらめくに

22 かきくもり夕立つ波のあらければ浮きたる舟ぞしづ心なき

原 田 敦 子

塩津山といふ道のいとしげきを、賤の男のあやしきさま
どもして、「なはからき道なりや」といふを聞きて

23 知りぬらむゆききにならす塩津山よにふる道はからきものと
と

みづうみに、おいつ島といふ洲崎に向ひて、わらはべの
浦といふ入海のかしきを、口ずさみに

24 おいつ島島守の神やいさむらむ波も騒がぬわらはべの浦^①

筆者は、かつて二度にわたってこの五首の歌群について考察を試み、20・23を往路、24を復路の歌と推定した上で、湖上での旅の不安を詠んだ22を展開軸として、前に都恋しの思いを切々とうたい上げた20・21を置き、後に「塩津山」なる地名と形容詞「からし」の縁語仕立てや、地名に含まれた「老」と「童」の対比など、ことばの機知を楽しむ余裕を見せる23・24を配したこの歌群を、それ自体一

つの完結体として、このような配列法をとった式部の意図を読み解くべきこと、さらには、22の歌では、「浮きたる舟」が、従来の「流浪」「漂泊」といった水平感覚ではなく、式部が湖上で夕立にあつて、激しく上下動する舟に身を委ね、初めて死の恐怖に直面することによって、自身の存在そのものまでもが根底からくつがえされる危険性ははらんだ、垂直感覚を伴った存在の原感覚をあらわすものとして詠まれていることを述べた。

以下の小論では、旅立ち早々に望郷の思いがうたい上げられた20・21の歌を取り上げて、旅路の紫式部の心中を占めていたものが何であり、この旅が彼女にとってどのような意味を持っていたかを改めて考えてみたい。

一 三尾が崎の性格

20の歌に詠まれた三尾が崎は、現在白髭神社が鎮座する高島郡高島町の明神崎のことであろうと推定されている^④。琵琶湖西岸のほぼ中央部、東に向かって突出した山地の一端で、滋賀郡と高島郡の郡界であるとともに、湖岸を走る西近江路が出岬の先端ですぐ湖に迫る典型的な隘路をなす、古来要害の地であった。『万葉集』巻九に、

思ひつつ来れど来かねて水尾の崎真長の浦をまたかへり見つ

(一七三三)^⑥

と詠まれる景勝の地でもあったらしいが、湖に突出した地形がこの地にもたらした意味には少なからぬものがあつた。式部の琵琶湖旅詠群の最初に三尾が崎の歌が置かれたのも、実はこの崎の有する象徴性にかかわつてのことではなかったか。

野本寛一氏は、「岬は陸地の果て、陸と海との鋭敏な接点、すなわち陸と海とがせめぎ合う場」であり、日本人は、古来、その岬を魂の原郷「常世」への旅立ちの場と意識し、また、常世から神々が依り来る聖なる場として守りつづけてきたとされているが、湖に突き出た崎にも同様のことが言えるのではなからうか。筆者は先に、琵琶湖の西岸唐崎の境界性について論じたことがある^⑧。水と陸との境界である崎は、人や物が寄り来る地点でもあつた。天平宝字八年(七六四)叛乱を起こした惠美押勝(藤原仲麻呂)は、愛発関を突破しえず西近江路を戻り、三尾が崎の隘路で官軍方に水陸より攻められて、妻子三十四人と乗船、勝野鬼江に浮かんだところを捕えられ、悉く斬首されている^⑨。勝野鬼江は、明神崎のすぐ北、高島町打下にある内湖乙女ヶ池に、わずかにその面影をとどめるという^⑩。天然の要害である三尾が崎が軍略上の要地であることは、言をまたない。あたかも魔の手におびき寄せられる如く、惨劇の地に踏み込んでいった仲麻呂の運命に、三尾が崎の境界性が重なって見える。

また、『三宝絵』下二十によれば、大和国長谷寺の本尊十一面

観音を彫った霊木は、大水の時に流出した「大ナル木」が「近江国高嶋郡ノミヲガ崎」に寄ったものであるという。この話は『今昔物語集』十一―三十一、「長谷寺縁起文」、「扶桑略記」（聖武天皇神亀四年三月三十日条）、「諸寺縁起集」、「諸寺略記」など多くの文献に収載され、いずれも細部にその伝を異にする。『三宝絵』の伝に關して言えば、寄り来る神の型を踏まえたこの縁起譚も、三尾が崎の境界性と無縁ではあるまい。旅中の紫式部が、三尾が崎にまつわるこのような歴史や故事をどの程度承知していたかは、分からない。しかし、この地を仲麻呂の悲劇や霊木伝説の舞台たらしめた特異な地形に強い印象を受けたことは、間違いないだろう。

上田篤氏は、サキの性格を、①藻刈場、②漁場、③境界、④見張所、⑤海からみたランドマーク、⑥航海上の難所などと列挙した上で、人びとからいろいろな思いの寄せられるサキが、一種神聖な觀念を帯びることを指摘しておられる。①の藻刈場については直接の資料がないが、20の歌により、三尾が崎が漁場であったことはたしかである。三尾が崎の頂上部に比定される壬申の乱の際の「三尾城」^④に見張所としての役割を認めるならば、三尾が崎は、サキとしての典型的な性格を有していたと言うことができよう。現在明神崎の名の由来ともなっている白髭明神は、垂仁天皇の時代の創建と伝えられ、『三代実録』貞観七年（八六五）正月十八日条に

授近江国无位比良神従四位下。

とある「比良神」が、これに当たるとされている。^⑤この崎は古くより聖なる地でもあった。

琵琶湖を西岸沿いに航行していたと思われる式部一行にとつて、この三尾が崎は、何よりもランドマークとしての意味を持っていたと思われる。藤本勝義氏は、「綱引く」漁は朝か夕方と見るのが普通であるとした上で、式部らがその時間帯に三尾が崎にいたということは、そこに宿泊したことを意味すると述べて、前日大津に泊した式部たちの一行が琵琶湖の船旅の第一夜を三尾が崎で過したと考えられたが、いかに波穏やかな琵琶湖であっても、湖面に突き出した崎に停泊することは避けられたのではないか。現に22の歌では夕立に遭つて、船が荒波に翻弄される恐怖を体験している。三尾が崎のすぐ北に存した勝野津は、『万葉集』に

大御船泊ててさもらふ高島の三尾の勝野の渚し思はゆ

（巻七・一一七二）

と詠まれるように、天皇の船も停泊する程の要港であつたし、『延喜式』主税上の「諸国運漕雑物功賃」の記事によれば、若狭国の租米を船積みして大津まで送る貢納津でもあつたので、式部らの一行もここに一泊した可能性が高い。だとすれば、式部らの船が三尾が崎にさしかかったのは、琵琶湖の船旅の第一日が無事終りに近づい

た夕方ということになる。大津から船出して一日の行程にあり、かつ湖に突き出した地形をなす三尾が崎は、琵琶湖を航行する船人にとって、格好のランドマークだったのである。

滋賀県教育委員会が実施した琵琶湖の漁業に関する民俗調査に、高島町のすぐ南、志賀町北小松で大正末期から戦前にかけて行われた漁業について、次のような記述がある。

地曳の期間は、一月より九月中頃までだったが、盛漁期は七月頃までである。一日のうち、早朝一回と夕方一回の二回曳き、それぞれ約三時間を要し、日出前及び日没前で月を目安として季節により時間が少し異なる。^⑰

平安の昔、紫式部が目にした三尾が崎での漁も、ここにいる日没前のもものではなかったろうか。

二 「立ち居につけて」と「立ち居るものと」

ただでさえ物思うことの多い黄昏時、見馴れない漁民たちが蜷集して網を引くさまは、都からの距離を実感させ、都恋しの思いをつのらせるものであった。「立ち居につけて都恋しも」の「立ち居」は、囁目の漁民の網引く動作であるとともに、都を思って落ち着かない式部の動作でもあろう。

題しらず

凡河内躬恒

立ち居につけて都恋しも……

秋霧のはるる時なき心には立ちあのそらも思ほえなくに

(古今集 恋二・五八〇)^⑱

ここでは、「立ちあ」は言うまでもなく秋霧の動きと人の動作に掛けられ、次の『赤染衛門集』の場合も、雉の動きと人の動作に掛けられる。

(大原少将入道が) 重くなりまさりたまふとありしに、

もののみあはれなるに、きじの立ち居せしに

山深くすまふきぎすのはろはると立ち居につけてものぞ悲しき

(五二五)

右のように、歌の世界では「立ち居」「立ち居る」は、霧や鳥について用いられることが多い。従来、式部の歌の「立ち居につけて」は、式部より少し先に肥前に旅立って行った親友の歌に、

津の国といふ所よりおこせたりける

17 難波渦むれたる鳥のもろともに立ち居るものと思はましかばと詠まれる「立ち居る」なる表現に関連づけて、解釈されることが多かった。はやく竹内美千代氏は、20の歌が17の歌を頭において詠んでいることに注目され、木船重昭氏は、20は17に対する返歌であると考えられた。これに対し、木村正中氏は、漁士の「立居」を見て何故式部が「都恋し」く思ったかは、17番歌を念頭に置いて詠んだと解釈することが必要で、友達は「群れたる鳥」から、式部は

「綱引く民」から、それぞれ対照的に、友と別れ、都を離れて、淋しい自分を見出しているのであろうとされつつも、20を17の返歌とまで想定するのは「いささか行き過ぎ」と述べられている。²¹伊藤博氏は、20の「立ち居」という表現、21の鳥に託する人恋しさの思いなどが、17の友の歌に呼応することを指摘された。²²

20の歌の「立ち居につけて」が、修辞上、17の歌の「立ち居るものと」を意識していることは確かであろう。しかし、「立ち居」「立ち居る」なる表現は、前掲の例の他、

友をなみ川瀬にのみぞ立ち居ける百千鳥とはたれか言ひけん

(和泉式部集・六六五)

たのむ樹に雨の漏りなば群鳥の立ち居につけていかに思はむ

(大斎院前御集・三七三)

などにも見られるのであって、決して特異なものではない。したがって、これらのことばの使用をもつてして式部と友の歌の間に余りに強い関係を想定することは、危険ではないか。むしろ、友の歌の「立ち居る」が、「むれたる鳥」について詠まれて、和歌の世界の常套的用法に従っているのに対し、漁民の労働について「立ち居」と詠む式部の歌の独自性が際立つのである。

17の歌の後には「返し」とのみあって、現存する諸本には返歌が記されていないが、もともとここには式部の返歌があったはずで、

17の友の歌にかかわる贈答は一応完結していたと思われる。そもそも「都恋しも」と詠んだところで、相手は既になにではないのか。友が「難波濁に群れている鳥のように、貴女と一緒にいるものと思えたら」と詠んできたのに対し、「漁民が立ったり坐ったりして休む間もなく働いているのと同じく、私も立ち居につけて都が恋しく思われてならない」では、すれ違いの感を否めない。

「てまもなく」は、也足叟本・同乙本・群書類従本などには「ひまもなく」とある。南波浩氏が、「手間もなく」の用例が他になく、「手間」が「作業するための時間。労働の時間の意」であることから、「てまもなく」は、手が作業しない意にこそなっても、その逆の意味を表わそうはずはない²³との木船重昭氏の見解に従って、「ひまもなく」の本文を採られた如く、ここは「ひまもなく」とするべきところであろう。手を休めるまもない漁民の労働のように、居ても立ってもいられない程、式部の胸に「都恋し」の思いを募らせたのは、何であつたのか。それが都ぶりの生活であり、別れてきた親しい人々であつたことは疑うべくもないが、17の歌の友は、実はその中にはいない。「綱引く民のひまもなく」の修辞法からすれば、この親友への友情と同じく、否、それにも増して、式部の心を占めていたのは、恋の思いだつたのではなからうか。

三 海人の恋

20の歌の上二句は、「ひまもなく」を導く序となっている。同様の修辭法は、

宮材引く泉の袖に立つ民の休む時なく恋ひ渡るかも

(万葉集 卷十一・二六四五)

恋をのみ飾磨の市に立つ民の絶えぬ思ひに身をや替へてん

(千載集 恋四・八五七・皇太后宮大夫俊成)

にも見られて、いずれも「民」の休む時なき労働や群集するさまが、下句の「休む時なく」や「絶えぬ」を導き、恋の思いを託する形象となっている。万葉歌は、第四句を「やむ時もなく」として『新勅撰集』恋二にも入るので、こうした発想は、平安時代を通じて継承されてきたとおぼしい。このようにみるならば、「民」の休む時なき労働に思ひ合われる式部の「都恋し」の情には、ひそやかな恋の思いが秘められていたと考えなくてはなるまい。網を引くのが「海人」ではなく「民」と表現されねばなかったのは、和歌世界における右のような「民」の詠法によったこと、疑いないが、そもそものは海人の営みも、「絶えざる恋」「苦しい恋」を託す形象として歌に詠まれることが多い。

題しらず

よみしらず

立ち居につけて都恋しも……

いせの海の海人の釣縄うちはへて苦しとのみや思ひわたらむ

(古今集 恋一・五一〇)

題しらず

小野小町

みるめなきわが身をうらと知らねばや離れなで海人の足たゆくる

(同 恋三・六二三)

身より余れる人を思ひかけてつかはしける 紀 友則

玉藻刈る海人にはあらねどわたつみの底ひも知らず入る心かな

返事も侍らざりければ、又かさねてつかはしける

みるもなくめなき海の磯に出でてかへるがへるも怨みつるかな

(後撰集 恋四・七九八、七九九)

このように海人が苦しい恋の形象に用いられるのは、「海松布」が「見る目」に、「浦」が「うら（怨・恨）」に掛けられる他、海人の手足の絶え間ない動作が、恋の絶え間なさと思わせるからであろう。『古今集』小野小町の「みるめなき……」の歌が、こうした海人の苦しい恋のイメージの形成に果たした役割には、測りしれないものがある。

紫式部は、ここ三尾が崎で、網引く漁民たちの休む間もない動きを見るうち、自分の胸に絶えず湧き上がってくる都恋しの思いと、その思いの中にひそむ恋の思いに、向き合わざるをえなかったのではないか。その恋の相手とは、やはり、後に夫となった藤原宣孝で

あつたろう。そう言えば、式部と宣孝とおぼしき男性の贈答の中にも、恋の嘆きをする海人が立ち現れて来る。

歌絵に、海人の塩焼くかたをかきて、樵り積みたる投木のもとに書いて、返しやる

30 よもの海に塩焼く海人の心からやくとはかかるなげきをやつむ

恋の嘆きを訴えてきた歌に対する返歌であろうが、歌絵の趣向や、ゆとりのあるうたいぶりからは、相手の心をわがものとした自信さえ読みとれる。それにしても、恋の「嘆き」を塩焼きのために樵り積み「投木」に思いよそえるあたり、海人と苦しい恋が分かちがたく結ばれたイメージであつたことを窺わせるものがある。このような手のこんだやりとりが交わされるのは、式部の帰京後のことと見てよいが、二人の交渉は式部の離京前から始まっていたらしい。

年かへりて、「唐人見に行かむ」といひたりける人の、
「春は解くるものといかで知らせたてまつらむ」といひ
たるに

28 春なれど白嶺のみゆきいやつもり解くべきほどのいつとなきかな

近江の守の女懸想すと聞く人の、「ふた心なし」と、つ
ねにいひわたりければ、うるさがりて

29 みづうみに友よぶ千鳥ことならば八十の湊に声絶えなせそ
18の「年かへりて」とは、式部下向の長徳二年から年が改まつての
意で、前年から「唐人見に行かむ」と言っていた人が、長徳三年に
なつて「春は解くるものといかで知らせたてまつらむ」と言つてき
たのである。「春は氷も解けるもの、それと同じように男女の仲も
解けるものだとは是非お知らせしたい」というからには、相手は前々
から式部に求愛していたことになる。式部の越前下向後のことも
思われないので、少なくとも長徳二年夏以前ということになる。
29の詞書の「近江の守の女懸想すと聞く人」も同じ男と考えられる
が、その男は近江守の娘に言い寄っていないながら、式部にも「ふた心
なし」と常に言い寄り続けていたのである。「近江の湖で友を呼ぶ
千鳥よ、いつそのこと、あちこちの湊で声を絶やさずおかけなさい
よ」と、相手を「千鳥」と呼んでいることからして、季節を冬とす
れば、越前下向前の長徳元年の冬がもつとも蓋然性が高いというこ
とになる。越前滞在中の長徳二年冬では、男の動向が式部に知れ
る可能性も低いであろうし、都から越前へ「つねにいひわた」るこ
とも、困難と思われるからである。紫式部の帰京を長徳三年晩秋・
初冬頃と考えれば、長徳三年冬の可能性もないわけではないが、帰
京から程なくということになって、「つねにいひわたりければ」と
いう情況とは齟齬する。この贈答を長徳四年冬とすれば、翌長保元

年春早々に推定される宣孝との結婚に余りにも接近しすぎることに
なろう。南波浩氏は、宣孝が筑前守の任期を終えて帰京した長徳元
年以後の近い頃に「近江守」とよばれるにふさわしい人物を検討さ
れた結果、永延二年から長徳二年七月まであしかけ九年にわたって
連続して近江介や近江権守をつとめた平惟仲がもっともふさわしい
と結論されて、惟仲が「近江守」と呼ばれる時期で、宣孝在京中の
冬というところから、29の歌が詠まれたのは、長徳元年冬以外には
考えられないとしておられる。⁵³⁾

29の歌の詠作時期を長徳元年冬とすると、長徳三年新春かと思わ
れる28の歌からは時間的に遡行することになるが、このあたりの歌
の配列は、15→19が親友との別れ、20→24が越前往還の旅、25→27
が越前の雪と続き、越前の雪を詠んだ歌が「白嶺のみゆき」を詠ん
だ28へ連接することによって、後に結婚することになる男（宣孝）
との交渉（28→31）へ、さらには結婚後のやりとり（32→37）へと、
歌群のスムーズな移行が見られるところで、29は結婚前の宣孝との
交渉を綴った歌群の中に位置しながら、男との関係のありようを明
かし、同時に、式部の越前下向の理由の一端を示唆する働きをして
いると考えることができる。式部は、一方で肥前へ下って行く親友
との別れを惜しみつつ、かねてから言い寄っていた男への複雑な思
いを抱いて、越前への下向を決意したらしい。29の歌の「いつその

こと、あちこちの人に声をおかけになったら」という台詞にも、強
い抗議や激しい怒りは感じられない。31の歌の左注に「もとより人
の女を得たる人なりけり」とあるように、既に妻もあり、その上他
の女にも言い寄っている男と知りつつ、その男への絶ちがたい思い
を如何ともすることができず、船上の人となった式部であった。

三尾が崎で目にする海人の絶えざる動作は、海人の絶えざる苦し
い恋を想起させ、それは、ただちに、自分に絶えず言い寄ってくる
男への想いにもつながってゆく。式部が「都恋しも」と言いながら、
「民」なる語を用い、その「ひまもな」き「立ち居」を詠んだのは、
抑えようとして抑えきれない男への思いが意識下に働いてのことでは
なかったらうか。

四 磯がくれの思い

21の歌で詠まれる「磯がくれ」に鳴く「たづ」の思いは、人目を
忍んで泣く式部の思いに通じること、言うまでもない。従来、この
歌は、詞書中の磯の浜の「磯」を地名とみるか、普通名詞とみるか、
鶴を詠んだこの歌の季節をいずれとみるかによって、往路詠か復路
詠かに見解が分かれてきた。筆者は、前稿で、竹内美千代氏や井上
真理子氏⁵⁴⁾によって指摘された『紫式部集』の地名表現の特色から、
「といふ」という説明語を伴わない「磯の浜」は、地名ではなく、

岩石の多い浜辺を指す普通名詞であり、本来渡り鳥であるはずの鶴についても、動物の生態についての知識に乏しい当時、湖辺に鳴く鶴など実見したことのない貴族の女性が、鶴・鵠・鷺の類も鶴に含めて見てしまうのも無理からぬところとして、21の歌を往路、西岸での詠と考えた。夏の鶴は『万葉集』に二首詠まれる他、『源氏物語』濡標巻では五月五日に、瞿麦合の歌では撫子の花と組み合わせで詠まれているのである。^{②③} いずれも夏の鶴を奇異と感じない感覚のあらわれとみなくてはなるまい。

井上真理子氏によれば、『紫式部集』の詞書中の地名に「といふ」がつくものは九例ある。このうち17の「津の国といふ所よりおこせたりける」と18の「筑紫に肥前といふ所より文おこせたるを」は、いずれも友が手紙を送ってきた場所を指していて、その後には友の歌が記されるか、あるいは想定される。残り七例については、いずれの場合も式部自身の歌が記されていて、しかもその歌にはすべて詞書に「といふ」との説明語を伴って記された地名が読み込まれているのである。

- 20 三尾が崎といふ所に
「三尾の海に」
- 23 塩津山といふ道の
「ゆききにならず塩津山」
- 24 おいつ鳥といふ洲崎に向ひて
「おいつ鳥島守る神や」
- 24 わらはべの浦といふ入海の
「波も騒がぬわらはべの浦」

- 25 日野岳といふ山の雪
「日野の杉むら埋む雪」
- 71 呼坂といふなる所の
「われ越しわぶるたにの呼坂」
- 88 「かひ沼の池といふ所なむある」と、人のあやしき歌語り
「なかひ沼のいけらじと」
「こや世にかへるかひ沼の池」

もつとも、88は「人のあやしき歌語り」の中にある例であるから、この場合除外したほうがよいであろう。このようにして見ると、詞書中に「といふ」を付して登場させ、式部が自身の歌に詠み込んだ地名は、すべて越前か越前往還の旅中のものであったということになる。それはしも、見知らぬ土地と地名そのものに対する式部の強い興味、さらにはこの旅への彼女の深い思い入れを裏書するものにかならなかった。

21の歌には、このような地名への強い興味は見られない。言うまでもなく、21の詞書に「磯の浜に」とあるのは、歌詞の「磯がくれ」を説明するためで、この場合の「磯がくれ」は、実際に鶴が磯の岩陰に隠れている意と、式部が人目を忍ぶ意をかけること、言うまでもない。しかし、このような「磯がくれ」の用法は、この時代必ずしも一般的ではなかったのである。「磯がくれ」は、『万葉集』の時代は、「磯がくり」として、実際に岩陰に隠れたり、磯に潜む意に用いられるが、平安時代に入ると、専ら人目を忍ぶ意に用いら

れた。

……潮さゐの 波を恐み 淡路島 磯隠り居て いっしかも
この夜の明けむと さもらふに……

(万葉集 卷三・三八八)
見渡せば近きものから岩隠りかがよふ玉を取らずは止まじ

(同 卷六・九五二)

ものかくとおもひて、しつけ、たとと歟
いそかくれあまのすさひにかきすつるか、るもくすを人かへさ
なむ

(中務親王集 伝寂然筆切)

恨めしや沖つ玉藻をかつくまで磯がくれける海人の心よ

(源氏物語 行幸)

忍伝書恋といへる心をよめる

藤原家実

磯がくれかきはやれども藻塩草立ちくる波にあらはれやせん

(千載集 恋二・七四八)

21の詞書の「磯の浜に」は、歌詞の「磯がくれ」が単なる比喩ではなく、実景を伴うものであることを明かすために、是非とも必要な辞であった。ただし、「磯」なる地の浜で、鶴が「磯がくれ」に鳴いていたというのでは、ことばの語呂合わせばかりが目立って、実景と比喩が重層する式部独自の詠法が生かされない。ここの「磯の浜」はどうしても普通名詞でなければならぬところであろう。か

立ち居につけて都恋しも……

つて清水好子氏が指摘された如く、詞書の「また」という書き方は、三尾が崎での詠に引きつづき、あまり時を隔てていない趣きを有していることからして、21は三尾が崎から程遠からぬ西岸のどこかで、20の歌の心情を引き継いで詠まれたとみなくてはなるまい。20と21の歌は、時間的にも心情的にも、きわめて近い距離にあったのである。

そもそもこのあたりの表現は、20の「都恋しも」が「意識的に用いられた上代調であり、古歌体表現」であるのをはじめとして、「三尾の海に綱引く民の」が下句「ひまもなく」を導く序として、絶え間ない恋の思いを託する形象となっている点、さらには「磯がくれ」が単なる比喩ではなく、実景をも詠んでいることなど、『万葉集』の詠法と共通するものを多く蔵している。それは鶴の鳴き声についても言えるであろう。古来、鶴の鳴き声は、妻を呼ぶもの、望郷の思いを起こさせるものとされてきた。

潮干れば葦辺に騒く白鶴の妻呼ぶ声は宮もとどろに

(万葉集 卷六・一〇六四)

あさりすと磯に住む鶴明けされば浜風寒み己妻呼ぶも

(同 卷七・一一九八)

鳥ひひ敏馬の崎を漕ぎ廻れば大和恋しく鶴さには鳴く

(同 卷三・三八九)

海原に霞たなびき鶴が音の悲しき夕は国返し思ほゆ

(万葉集 卷二十・四三九九)

21の歌の「おなじ心」とは、別れてきた人々を思い、都を恋しく思う心であること、言うまでもないが、望郷の思いはともかくとして、人目を忍んで泣きつつ恋い慕い、「³⁵なが思ひいづる人やたれぞ」と鶴に問いかけながら、自らにも問わねばならなかったところに、自身の気持ちを整理しきれない式部の迷いや心の乱れがあった。『万葉集』以来の詠法の伝統に従えば、相手はやはり異性であろう。

五 友情と恋

紫式部の越前下向歌群は、直前に肥前に下った親友との別れの贈答歌群(15-19)を置くことによって、親しい人々と別れ、遠国へ下る悲哀感や旅愁をより深いものとしている。友との離別の悲しみは、越前到着後のやりとり(18・19)をも一連のものとして、越前下向歌群の前に置き、後に夫宣孝の死を詠む歌の前に友の死を詠む歌を置くなどの措置によって、さらに哀切なものとなった。しかし惑わされてはならない。この友との別れと並行して、式部にはひそかに想う男との別れがあったのだ。既に妻がありながら他の女にも言い寄り、式部にも絶えず言い寄ってくる男、その男の存在は式部の中で次第に大きなものとなりつつあったのではないか。式部と親

友とのやりとりを仔細にみるならば、相手の熱心さにくらべて式部の方は少し冷静すぎるという感がなくもない。

姉なりし人亡くなり、また人のおとと失ひたるが、かたみにあひて、亡きが代りに思ひ思はむといひけり。文の上に姉君と書き、中の君と書きかよひけるが、おのがじし遠き所へ行き別るるに、よそながら別れ惜しみて

15 北へ行く雁のつばさにことづてよ雲のうはがきかきたえずして

返しは西の海の人なり

16 行きめぐりたれも都にかへる山いつはたと聞くほどのはるけさ

津の国といふ所よりおこせたりける

17 難波濁むれたる鳥のもろともに立ち居るものと思はましかば返し

筑紫に肥前といふ所より文おこせたるを、いと遙かなる

所にて見けり。その返り事に

18 あひみむと思ふ心は松浦なる鏡の神や空に見るらむ返し、またの年もてきたり

19 行きめぐりあふを松浦の鏡には誰をかけつつ祈るとかしる

15の歌で式部が「絶やさずお手紙くださいね」と言っているのに対して、相手は「一体いつまたお目にかかれることや」と再会を願ひ、肥前への下向途中、わざわざ難波潟から「難波潟に群れている鳥のように、あなたと一緒にいるものと思えたら」と言い送ってきている。諸本この歌に対する返歌を欠くが、次なる便りも肥前から遠く越前にいる式部にあてたものであつた。式部の返歌が「あなたに逢いたいと思う私の心は、松浦の鏡の神も御照覧あることでしょう」と、神かけて友情の深さを誓っていることからすると、あるいは相手の文に式部の冷たさを恨む言辞があつたのかも知れない。少なくとも、友とのやりとりにおいて、終始積極的であつたのは、相手側だつたということは動くまい。この間、式部の心を占めていたのは、友への思いもさることながら、男の求婚にどう対処するかという悩みだつたのではあるまいか。

長徳二年紫式部は何歳になっていたのか。天禄元年（九七〇）出生説に従えば二十七歳、天延元年（九七三）出生説に従えば二十四歳、いずれにしても式部にもようやく晩い春がめぐつてしようとしているのだつた。遠国越前への旅立ちにあたつて、彼女の心が千々に乱れても不思議はない。式部から「姉君」と呼ばれた親友の年齢は定かではない。式部の従姉妹でもあつたと思われるこの友は、おそらくは未婚のまま肥前で没し、二人の再会が果たされることはな

かつた。恋することもなかつたのか、ひたすら式部を慕っていただけに、その死はなんとも哀れで、式部の胸に深くつきささつたことと思われ。

遠き所へ行きし人の亡くなりけるを、親はらからなど
帰り来て、悲しきこと言ひたるに

39 いくつかの雲路と聞かば尋ねましつらはなれたる雁がゆくへ
を

長徳二年（九九六）の夏、越前に旅立つた式部の一行より少し早く肥前に出発した従姉妹の一家が帰京したのは、長保三年（一〇〇一）のことであつたろうか。南波浩氏は、「つらはなれたる雁」を帰雁とし、詠作時期を晩春と考えられている。長保三年四月二十五日の藤原宣孝の死に先立つこと約一ヵ月、式部は奇しくも長徳二年にあいついで別れた二人の訃報を、このたびも続けて受けたことになる。幼くより親しい人々との別れを何度も体験した式部にとって、この二人の死は、特別重要な意味を持っていた。しかし、二人との交渉の成行きや別れを同時並行的に記すことは、印象散漫の謗りを免れない。そこでとられた方法が、越前下向前に友との贈答歌群をまとめ、宣孝との交渉歌群は越前下向後にまとめるという構成法であつた。そのため、越前下向歌群の旅愁や望郷の思いは、とかく友との別れに関係づけて受け取られることが多い。しかし、20・

21の歌の表現に即してみるならば、このとき式部の心を乱していたのは、友との別れの悲しみよりも、むしろ自分でもどう整理しようもない、秘められた男への思慕であつたと言ふことができるであらう。

再び、「立ち居るものと」と「立ち居につけて」に言及するならば、友は式部と「もろともに」「立ち居る」ことを願ってきたのに対し、式部の「立ち居につけて」は、「立つたり坐ったりするにつけて」と落ち着きがない精神状態をあらわす。友の心は一途に式部に向けられていた。もしこの友を思うのならば、式部の心もまっすぐ友のいる「西の海」に向けられるべきで、「立ち居につけて都恋しも」とはならなかったであろう。心がつかめない相手だからこそ、女心はしきりに波立ち、男のいる都に向けられるのである。式部の琵琶湖旅詠を、肥前に下った友との友情に力点を置いてみると、当時としては結婚適齢期をはるかに越えた紫式部の女心と、彼女の旅路の一面が、見落とされてしまふのではないだろうか。

注

- ① 引用と歌番号は、新潮日本古典集成による。
- ② 拙稿「紫式部集の配列——越前往還の旅をめぐって——」『大阪成蹊女子短期大学研究紀要』第二八号、平成三年三月。
- ③ 拙稿「浮きたる舟と近江——紫式部の存在の原感覚をめぐって——」

『大阪成蹊女子短期大学研究紀要』第三七号、平成二二年三月。

④ 吉田東伍「増補大日本地名辞書」第二巻、七五五頁。西井芳子「三尾崎について」『古代文化』第六巻第六号、昭和三六年六月。日本歴史地名大系25『滋賀県の地名』一一〇六頁。

⑤ 注④西井論文。

⑥ 引用は新編日本古典文学全集による。

⑦ 『神々の風景——信仰環境論の試み』（平成二年、白水社）四六頁。

⑧ 拙稿「水辺の鎮魂——蜻蛉日記の唐崎祓——」『国文学攷』第一四五号、平成七年三月。

⑨ 『続日本紀』天平宝字八年九月十八日条。

⑩ 角田文衛「惠美押勝の乱」『古代文化』第六巻第六号、昭和三六年六月。『角田文衛著作集』第三巻所収。岸俊男 人物叢書『藤原仲麻呂』（昭和四四年、吉川弘文館）四〇六―四〇七頁。

⑪ 寺川真知夫「御衣木の祟——長谷寺縁起——」石橋義秀ほか編『仏教文学とその周辺』（平成一〇年、和泉書院）所収。

⑫ 『海辺の聖地——日本人と信仰空間——』（平成五年、新潮社）五六―五九頁。

⑬ 注④西井論文。

⑭ 天武紀元年七月二十二日条。

⑮ 日本歴史地名大系25『滋賀県の地名』一一一八頁。

⑯ 『源氏物語の人ことは文化』（平成二年、新典社）四一六―四一七頁。

⑰ 『湖南の漁撈活動』（昭和五八年、滋賀県教育委員会）三四五頁（東条寛氏執筆）。

⑱ 以下、歌の引用および歌番号は、特にことわらない限り新編国歌大観による。ただし、私に表記を改めたところがある。

19 『紫式部集評釈』（昭和四四年、桜楓社）六七―六八頁。

20 『紫式部集の解釈と論考』（昭和五六年、笠間書院）一八八頁。

21 『紫式部集全歌評釈』『国文学』第二七卷第一四号、昭和五七年一〇月。

22 新日本古典文学大系『土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』

三三二頁脚注。

23 注20の書、四三頁。

24 『紫式部集全評釈』（昭和五八年、笠間書院）一一八頁。

25 注24の書、一七一―一七二頁。

26 『紫式部集補註——いそのはま・たづ考——』『神戸女子大学紀要』第

二号、昭和四六年二月。

27 『紫式部集』の地名——磯の浜をめぐる詞書の文章——『愛文』第

一六号、昭和五五年七月。

28 注2に同じ。

29 注27に同じ。

30 新編日本古典文学全集は「岩隠り」とするが、原文には「石隠加我欲

布珠乎」とある。澤瀉久孝氏は、ここの珠は真珠即ち鮫珠と思われ、三

八八の「磯隠居面」に近いものであるとして、イソガクリと読み、岩礁

にかくれての意としておられる。『萬葉集注釋』巻第六・九七頁）

31 引用は私家集大成による。

32 岩波新書『紫式部』（昭和四八年）四五頁。

33 注24の書、一一八頁。

34 『紫式部集全評釈』・『新日本古典文学大系』に従い、「なに」を改訂す

る。

35 今井源衛 人物叢書『紫式部』（昭和六〇年新装版、吉川弘文館）四

三―四五頁。

36 岡一男『源氏物語の基礎的研究』（昭和二九年、東京堂）一六九頁。

37 注36の書、六九頁。

38 注24の書、二三六頁。ただし、氏は「つらはなれけむ雁」の本文を採

っておられる。

立ち居につけて都恋しも……